

呪術の發生に關する問題 (承前)

宇野圓空

四 自發的行爲の習慣化

行爲の形式の上から見た呪術の起源が、衝動的な行爲や表出運動にあること、而して種々なる呪術觀念が全體として後に付加されたものであることは、大體に於て之を是認しなければならぬのであつて、特殊の因果觀念や呪力の信念から呪術の發生を論ずるのは、心理學的にも歴史的にも妥當な説明とは云はれない。それで呪物や呪文や其他の呪術行爲の根源が本能や感情の力によつて自發的に出た行爲にあるとすれば、これらの行爲はある目的を以て計畫的に爲される行爲ではない。怒にまぎれて對手の持物を壊したり、恨みに燃えて持つた棒で人をねらふなどは、本來強い感情に伴はれて衝動的に現はれる表出運動である。胸に痛みを感じたり手を傷けた時に、局部を撫でたり甜めたりするのは、他の動物にもある本能的な行爲であつて、實際の效果はとにかく、本人には治療の目的も何もない自發的な行爲である。戦ひ

の門出に勇氣に溢れて踊り、狩獵の獲物を前にして喜んで歌ふのは、これまた遊戯本能や模倣本能に助けられた感情表出の運動であつて、何等實際的效果を計算して企てられたものでない。

故にこれらがやがて形代や撫物を焼いたり釘付にしたり、呪棒で敵をねらふ呪咀となり、吸出しもみ出しの呪術治療となり、又戰勝豐獵の爲の歌舞儀禮となるにしても、本來最初のまゝの状態ではそれ自身呪術儀禮とは云はれないのであつて、これらはむしろ單なる本能行爲衝動運動或は遊戯と見做さなければならぬ。それで呪術の發生がこれらの行爲に其淵源を求むべきであるにしても、呪術發生の契機又は時期は決して此點にあるのではなく、これらの行爲が更に或る性質又は特徴を持つた時に嚴密な意味の呪術の發生があるといはなければならぬ。それでこれらをアレツトのやうに rudimentary と呼ぶことは却つて混亂を生ずる恐れがあるのであつて、ペイトがこれを『先呪術的』行爲 *primärgische Handlung* と云つたのは當を得たものである。

然るに此種の行爲は批判的計畫的でなく本能的自發的であるから、同じやうな場合にまた同じ形式で現はれ繰返され易い。従つてそれは個人的にも習慣行爲とな

り易いのであるが、また其基礎である本能や衝動は多く生得的のもので個人的差異が少く、各人に共通な性質を持つて居るから、社會的共同を生じ易く、社會的の風習として行はれるやうになる。習慣となつた行爲はある刺戟に對する反應の形式として個人を無意識的に常にその方向に導くばかりでなく、その變更は多く或る種の不快感を伴ひ新たな努力を要する。換言すれば習慣の墮性は個人的にも一稱の強制力を持ち其行爲に或る權威を與へるのであつて、従つて習慣的行爲はこれに反する行爲形式に對してある價值意識を伴つて來る。ことにそれが社會的風習となつた時には、其行爲の強制力は社會を背景とする強い權威を以て個人に臨み、個人的の好惡や便宜によつて自由にこれを變更することを許さない。即ちこれは行爲の目的や效果の概念とは獨立に、義務感を伴つた社會的價值として個人に現はれる。かくして偶然的な本能行爲や衝動運動が儀禮化され、ベートの所謂『先呪術的行爲』が始めて儀禮的となるのである。

それで此種の行爲が性質上呪術である爲めには、かゝる習慣化儀禮化の過程を経なければならぬといふ考へが、儀禮先行論者の中に相當有力である。ハートランドは自發的衝動的な行爲が呪術となるのに、それに効果が認められることよりは、それ

が習慣となり儀禮となることが重要な點だと思ふ。キングは特に行爲の習慣化を宗教や呪術發生の中心點であるとして、普通の實際的行爲やことにこれに伴ふ非實際的な行爲形式が、社會の習慣風習となる時、その社會的價値の意識は宗教的な色調を帯びてその習慣が宗教的呪術的儀禮となるのであつて、其實際的效果の觀念の如きは、その社會的宗教的な價値意識から派出するといふのである。(Development of Religion. Pp. 113-113, 156, 169, 181, 214) ヲレットは一方でその rudimentary magic を衝動的行爲其物に認め、他方でそれが正當な developed magic な表出となるにはその效果や神祕性の意識が重要な契機だと認めるのであるが、しかも彼が呪術と宗教との總體であり本體であると思ふ『儀禮』^{the} その物は非實際的行爲の習慣化したものであり、その呪術としての性質は習慣性 customariness にあることを後に至つて力説して居る (Hastings's Encyclopaedia of Religion and Ethics. VIII. 247-248)。

然しかゝる行爲が習慣となり儀禮化するといふことが其自身に呪術としての性質をこれに付與するものであるかどうかは疑問である。社會的習慣となればその行爲は最早單に衝動的な偶然的なものではなく、一定の形式が定つて、個人はこれに對して多少義務づけられ、またそれに對する價値意識はやがて必然にその效果の觀

念を産むに至るのであらう。けれどもすべての社會的習慣少くとも非實際的な行爲の習慣化したものが悉く呪術であるとは云はれない。更にこれに呪術としての必然的な性質が加はつてその習慣が始めて呪術儀禮となるのである。マレットやモースは呪術と宗教を總稱して儀禮と呼ぶけれども、歐洲に於ける *rit*, *rites* といふ語の傳承的な意味に従つて、たとへすべての儀禮が宗教的若くは呪術的のものであるとしても、呪術や宗教に於ける行爲は必ずしも儀禮ではなく、儀禮化しない自由な呪術的行爲や宗教的行爲は甚だ多い。従つてある行爲が社會的習慣や傳承的形式として儀禮化することは、たとひそれが呪術としての性質を有するに至る必然の過程であるにしても、其自身呪術成立の契機ではなくして、それを呪術たらしむる要素は他に別になくてはならない。

五 意志及び效果觀念の發生

偶然的な本能運動や衝動行爲が個人的若くは社會的に習慣となつて繰返されることは、呪術成立の過程に於て重要な意義をもつて居るが、それはかくして幾度か同じ行爲形式が繰返されるうちに、終にその行爲が單に衝動的な表出運動や自發的な

本能行爲でなくなり、一の意志的な行爲となるからである。感情的興奮による衝動的な行爲や本能の強制によつて現はれた行爲でも、人は或る程度まで意志の方によつて之を抑制することが出来るのであつて、この抑制のないところにはすでに多少それを是認する意志の態度が現はれて居るが、同じ形式の行爲を半ば習慣の力によつて、最初ほどの感情的興奮の力なしに繰返すには、行爲せんとする意志が積極的にこれを助けなければならぬ。ましてそれが社會的習慣として行はれる際には、そこに幾らか感情の社會的傳播があつて、各個人が多少同様な感情を経験して居るにしても、多數の模倣者追隨者に於て、少くとも模倣意志追隨せんとする意志が働かなければ、それが實際に行はれることは困難である。

それで呪術的儀禮が此種の行爲運動の習慣化から成立つことを是認すれば、當然それがもはや單なる本能や衝動ではなく、或程度まで意志的行爲となつて居ることを認めなければならぬ。プロイスが本能的な治療行爲や其他の所謂呪術も、それが單なる本能である間は *magisch* ではないとし、呪術の最初の形式である模倣運動等の類比呪術は表現運動の一種として、慾望の目的結果を表現せんとする行爲であり、單純な感情行爲はこれに意志が加はつて類比呪術となると云つたのも此意味であら

う。

かくして單なる本能的行爲や感情的表出運動が意志的行爲となり、少くとも行爲せんとする意志によつて指導されることになる、それはまた多くの場合にある目的の意識を含み、この目的に向つての意志の働きのなる。即ち單なる本能運動でもそれは與へられたる自然的目的に向つて居り、感情的行爲でもその感情のうち、或る程度の自我の動向即ち意志目的を含んで居つて、感情の表出は同時にまた意志の表出でもある。従つてこれらの行爲が意志的に行はれるとなると、この本來の目的はその行はんとする意志と結合して、この目的に向つて行はんと意志することになる。勿論意志が單に行ふこととそれ自身を目的として他に何らの目的を意識しないこと、或は模倣、追隨のみを目的とする意志行爲もあるが、行爲が意志的となり自律的となるほど、其意志には力強い目的が要求され、單に行はんが爲め模倣せんが爲めといふ以外の目的觀念が意識の中に入つて來て、それは普通に云はれる意志的行爲即ち目的行爲となるのである。尤もこゝで本能的衝動的な行爲が意志的になり目的の意識が現はれるといふのは、必ずしもその行爲がある結果を得る爲めの手段として企てられるといふのではなく、むしろ最初はたゞある目的の固執の下に其行爲が

行はれるといふ意味に於ての目的行爲である。たとへば敵を殺さうといふ意志が槍を振ふ行爲に伴ひ、動物の聲や形をまねる行爲にそれを獲たいといふ念願が働いて居るといふだけで、目的と行爲との必然關係も意識されず、その目的の實現が可能であるかどうかの反省もなく、むしろ盲目的な固執的行動に過ぎない場合が多いのである。

然し單なる本能運動や衝動が意志的になり、こゝにいふ意味での目的行爲となつて來ると、其形式が本來呪術となる可能性をそなへて居る限り、それ自身呪術と認められ易くなつて來る。フイーアカントは單なる感情の興奮のみでは呪術を成さず、表出行爲に結果意志が加はる時に呪術が成立するといひ、呪術の最初の段階である表出運動の最後に結果意志が現はれると考へた。シュミットも目的意識のない本能行爲は呪術であり得ないといつたが、マレットが原型的な呪術行爲に於ける意志が客觀的に投射される時、その行爲が始めて完全な呪術となるといふのも、此邊の消息を傳へるものである。

そこで若しキンの云ふやうに呪術が非實際的な行爲の習慣化した儀禮であつて、何等の効果をも期待しない價值尊重の態度を (valuational attitude, appreciative rite) 主とす

るのであるならば、正しくこゝに呪術の成立を認めることが出来るであらう。然し呪術は宗教のやうに非實際的な單なる尊重行爲ではあり得ない。宗教的儀禮は屢々實用的な効果を期待しない單なる價值尊重の行爲であることもあるが、呪術は常に何等かの實效を齎さんとする實際的な行爲又は儀禮であつて單純な表現や模倣等の非實際的な行爲は、普通の意味では呪術とは云はれない。たとへこれに伴つてある意志や目的が意識され固執されて居つても、それが行爲その物の結果として考へられない以上、それは普通の意味の目的行爲ではなく、又實際的行爲でもないのであつて呪術として必然な性質を有せず、依然としてたゞ先呪術的な儀禮の形式が成立したといふに過ぎない。

ところがすでに目的の意識があり、意志の固執があれば、やがてそれを行爲によつて實現される結果として考へ、行爲と目的とを因果的に結びつけて、その効果の觀念が現はれて來るのはたゞの一步である。單なる目的の意識があるのと行爲の効果の觀念が伴ふのと、心理學的性質としては相當の差異があるが、實際上の轉化は薄紙一枚の距離である。ことにそれが習慣化した儀禮である場合には、この因果的結合は多く強制的であつて、雨を望む切なる願から多少偶發的に出た模倣儀禮は、その客觀

的效驗を認めさせねば止まない。蓋し社會的價值としての習慣儀禮は、その效果の信念によつてさらにその永續性が保證されるからである。尤も特殊の目的を有しない隨伴的な運動や、本來ある目的の爲めにしながら何時かそれが忘れられて單なる習慣儀禮となつて居るやうな行爲には、この效果觀念は屢々外部から偶然的に付與されることがある。即ちある原因の不明の事象がかゝる行爲や儀禮と時處の關係に於て接近して起つた時に、その事象の原因を探求して、簡單にこれをその行爲や儀禮に歸するとは、原始的な社會には常にあることであつて、病氣の原因を探して近所の者の行つた呪術的な行爲がそれであると認定したり、變疫疫癘の源を考へてある習慣儀禮を怠つたからだと想像したりするのは、人類學的事例の多數が示すところである。而してこれが爲めにむしろ偶然的無目的であつたその呪術な行爲や儀禮に積極的若くは消極的な効果が認められて來る。ペートは戦争の時部落に残つて居る婦女の踊も、本來は感情的模倣的な行爲で何等效果觀念もなかつたのであるが、偶然にそれが幾度か戰捷と合致した爲に、後には戰捷の效果ある儀禮として行はれるやうになつたのであると説明し、原因不明の事象に強ひてある原因を想定せんとする『原因説明欲』Trieb zu ursächlichen Erklärungの働きが呪術發生の一つの動機だと

見做してゐる (Religion und Magie bei den Naturvölkern. 95—102)。

いづれにしてもこれらの習慣的行爲はそれに效果觀念が加はらなければ性質上完全に呪術とは認め難いのであるから、そこで呪術成立の契機をばかゝる行爲儀禮に於ける效果觀念の發生にありとする説が甚だ有力である。ペードは呪術的な様式も行爲も單にこれを風習として行ふのみでは呪術でなく、現實の效果の觀念が伴つて始めて呪術儀禮となるといつて居る。マレットは一方で儀禮の成立を無目的な隨伴行爲の習慣化にありとしながら、またその習慣の價值はその行爲の『力』『働き』と考へられて、そこに效果の觀念が現はれるとし、この效果の信念こそ呪術や宗教の儀禮を單なる美的行事と區別する要點だと見做して居る (Hastings' Encyclopaedia of Religion and Ethics. VIII. 247—248)。^o またソードは偶發的な行爲がある效果と結合されてそれに對して有效と認められる時に呪術となり、行爲とその結果との間に簡單素朴な因果關係の觀念があるといふ (The Origin of man, 118—119, 112)。^o もとよりこの因果觀念といふのはプロイスの所謂複合的集合的表象や合一知覺による原始人通有の極めて簡單な二事の直接的結合であつて、普遍的な概念としての因果律などゝは大に趣を異にし、そこに何故といふ反省もなく、また行爲のどの部分が效果の原因とし

て主であり従であるかの分別もなく、唯だ經驗上一定の行爲またはその一群がある効果を齎すといふ單純な經驗的信念に過ぎない。故にフイーアカントなど呪術の最初には何等因果の觀念はないといふ人も多いのであるが、しかしある行爲にその効果を認め、この目的に對する手段としてそれを實行するところに、原因と結果の關係が認められてゐるのであつて、その關係の精密な内容や過程の觀念は缺けて居るにしても、それは性質上最も簡單な因果觀念だと云はなければならぬ。

また屢々呪術の最も簡單な而して最も原始的な形式だと云はれる『意志呪術』^{三三} magic は、意志の直接的效果の信念に基くものであつて、ある目的の執念が直にこれを客觀的に實現すると信せられるのである。従つてかゝる呪術にはその原因又は手段としての特種の行爲を必要とせず、たとひ其意志を表現するやうな行爲がこれに伴つても、それが客觀的效果の原因とは考へられず、むしろ意志その物が効果を齎す原因と考へられることが多い。然し此場合に行爲といふ語はこれを廣い意味に解しなければならぬのであつて、こゝに客觀的效果に對する原因手段となる行爲は、意志の固執に伴ふ外部的な動作ではなくして、意志することそれ自身である。即ち意志することを手段とし、その内容である效果の實現を目的として執念する時に、意志

するといふ行爲とその効果との間にまた一の因果關係が認められて居る。もとよりこれは意志呪術に於ける主客雙方の當事者の心理内容を多少論理的に説明したのであつて、當事者自身の意識に於ては極めて漠然たる感じに過ぎない。故に彼等自身が多少この因果を反省する場合には、意志の固執に常に何等かの程度で伴つて起る外部的動作に其効果の原因を歸し、一層具體的に其因果を説明せんとするのが常であつて、やがて此隨伴的行爲が其呪術の中心的要素としての目的行爲となつて來る。いづれにしてもある行爲が呪術的である場合には必然これに效果の觀念が伴ふのであつて、従つて一般に呪術を實際的な行爲又は儀禮に限る以上、其行爲形式の根源はとにかく、それに效果の觀念やある程度の因果觀念が現はれた時に、眞にそれが呪術として成立するものと認めざるを得ない。

六 呪術と自然的方法との分化

かくして實際的な行爲儀禮としての呪術の特質が明かになり、呪術成立の契機も略々決定せられたのであるが、なほこゝに呪術と科學的又は自然的技術との關係の問題から、嚴密なる呪術の成立に更に一の制限を付けようとする意見がある。呪術

と自然的技術との歴史的發生關係については、從來前者を後者の特殊的延長と見る考へど、後者を前者の精練されたものと見る考へどあつて、何れか一方を他方からの派生と見做さんと試みた。また或る人々は最初呪術とも自然的技術とも其性質を明かにしなかつた實際生活の行爲が、漸次に相異つた様式を以つて對立して、兩者が分化するに至つたと云ふ。なほ反對に自然的技術と呪術とは人類の生活の最初から對立してゐたと考へる人もあるけれども、これを人類學的事實から判斷し、また原始的生活の心理學的考察を進めて見ると、ハートランドも云つたやうに原始的な生活行爲には自然的と呪術的といふやうな對立區別が最初からあつたと考へられず、又此時期の生活行爲には強ひてそれを何れかの一つに歸着し得べき特徴があつたとおもはれないのであつて、兩者が分化對立して各々其特徴を明かにするのはよほど新しい時代に屬する。而して現代の文化生活に於ても可なり多くの部分が、性質上自然的とも呪術的とも區別し得ない状態にあることは事實であつて、それは特に非實際的な衝動的又は隨伴的行爲に於てのみならず、實際的な行爲に於ても、我々自らこれを自然的とも呪術的とも截然批判しかねる場合が随分多い。

然らばある時代に自然的技術と呪術との區別が意識され出したのは如何なる事

情によつてあるか、また兩者を區分對立せしめるその心理的性質はいかなる點に存するのであらうか。すでに呪術的行爲形式が本能や衝動よりして意志的行爲となり目的行爲となり、さらに效果の信念を伴ふ所の實際的行爲となつた時其效果と行爲との間に簡單な因果觀念があることは、さきに述べた通りである。然るにかく經驗的に直接に結びつけられた因果關係は、知的反省が進むと共に漸次其理由と内容が問題となつて來る。而して時としては任意的な解釋が與へられるが、元來呪術の效果目的は其行爲の必然の結果として認められたものでなく、單なる慾望から直接に投射されたり或は外部から偶然的にその行爲に結びつけられたものであつて、これに對する行爲はまた此目的に應ずる適當な方法として選擇され計畫されたものではなく、別な動機から與へられた行爲形式ある。故にその行爲と目的との連絡は、ある目的の爲に企てられた日常の行爲や普通な經驗からある行爲に認められた效果の關係に於けることは大にその趣を異にして居る。従つて呪術的な行爲と其目的とを無反省に因果として結びつけて居る間はこれらの兩者の區別が注意されななければ、呪術行爲に於ける因果の内容過程がある程度まで省察されて來ると、當然それが他の日常生活に於ける行爲の因果關係と著しく異つて居ることが明かに

なる。こゝに於て少くともある呪術的な儀禮や方法は他の生活方法に對して特異のものとして區別され、一般の生活行爲を自然的とするならば、それは超自然的神秘的のものとして認められる。もとより最初は全體の生活を自然的と呪術的に二分して其對立を意識するやうなことはあり得ないが、呪術的行爲をなすに當つて、その因果關係の特異性が認められ、これを日常の自然的方法とは別のものとして、神祕の意識がそこに加はることは極めて當然の過程である。

勿論呪術の神祕性は必ずしも其行爲と目的との因果關係の異常性の認識からのみ來るのではなく、結果その物の珍らしさや方法それ自身の異常なことが、それに神祕的な色調を與へることも少くない。然し結果や方法の珍らしく異常なことは、多くの場合實は兩者の關係の特異性から來て居るのであつて、獲た動物の珍らしさよりも、これを呪文の力で獲たから不思議であり、咀ひの法の物凄いやよりも、それで對手が殺せるから變なのである場合が多い。呪師がことさら奇抜な業をしたり怪異な物を使つたりするのは、自然的な方法に對する呪術の神祕性が一般に認められて後に、ことさらその神怪なこと即ち呪術の特徴を誇張せんが爲めに外ならない。要するに呪術的行爲に於てその目的と方法とが多く偶然的に無理な結合をして居るこ

とは、其因果觀念の内容の反省が進むにつれて、自然的な行爲に於ける因果と異なることに注意させ、兩者をどの程度にか對比して、呪術的行爲を異常的神祕的と認めさせるのである。

七 呪術に於ける神祕意識

そこで多くの學者は呪術となるべき實際的行爲に神祕意識が加はつて、これが一般に異常的なものと認められ、自然的技術との對立を現はした時に、それが始めて眞の呪術として成立すると見做すのである。マレットが呪術の成立に其習慣化や效果の觀念の重要なことを説いたのは前に述べた通りであるが、同時にまた彼はそこにマナの觀念が発生して神祕的な因果觀念の加はることを呪術として必然的な性質と見做すやうである。モースは自然的技術に對する呪術的儀禮の特徴は其特殊の力の觀念にあるのであつて、效果の原因の觀念が自然的のものと異なるところに呪術の特質があると認めたが (La Prière. 69—70) シュミットも自然的因果を超越する特殊の因果觀念の發現を呪術成立の要件と見做して居る (Der Ursprung der Gottesidee 481.

485)。

然し呪術に於ける神祕意識が本質上重要なものであり、ことにそれを自然的技術に對して區別する唯一の特徴であるとしても、それは必ずしも呪術の成立に缺くべからざる要件ではなく、むしろ呪術が可なり發展して後に現はれる特質に過ぎないといふ考へが、他方でまた相當に力説されて居る。プロイスやフイーアカントは呪術と自然的行爲との分化對立は比較的後代のことであつて、呪術その物の成立はこれに神祕意識が生ずるより遙か以前にあるといふ、フカールは原始の呪術は單なる經驗的行爲であつて、自然とか超自然とか因果の法則や特殊の力の觀念などはないといふ (Historie der Religion. 226—229, 231, 236—237) リードによると最初の呪術は簡單な漠然たる因果觀念の延長であつて、自然法との區別はなく、神祕意識によつて呪術が發生するのではなしに、呪術が成立してからその神祕性を自覺するのである (Origin of man. 122, 126)。

こゝにいふ見方も確かにある事實の真相に觸れたものであつて、特に呪術が超自然的因果等の先在觀念に基いて計畫されて發生するものでないことを明かにする爲めには、極めて有力な説明である。原始の呪術的な儀禮が神祕の意識を有せず、自然的技術との區別もなかつたといふ事實、及び呪術の發生に超自然等の觀念が基礎と

なるものでないことは承認しなければならぬのであつて、儀禮先行論の功績はこの點を説明したところにある。然し今これを呪術の性質の問題及び嚴密な意味の成立の問題として考へると、神祕意識のない實際的行爲や儀禮が正當に呪術と名け得るものであらうか。また日常の自然的行爲と區別されてゐない行爲形式は、それが實際的な儀禮となつて居り、後に一般に呪術と認められる形式を具へて居るといふだけで、嚴密に呪術と云ひ得るであらうか。若し兩者の未だ分化しない時期を想定するならば、それは嚴密に自然的技術でもないと同時に、未だ眞の呪術でもないことを認めなければならない。強いて其形式の上から後の呪術たるものゝ原型であるころこれらは自然的でもなく呪術的でもない單純な實際的行爲と見做したが適當である。而して嚴密なる呪術はそれが自然的と云はれる行爲形式と或る程度に對比されて、特に神祕的な性質を有するといふ感じ、少くとも自然的行爲に於ける因果關係と異つた關係があるといふ意識が現はれた時に、始めてその成立を見ると云はなければならぬ、恐らくこれは公平に見て呪術といふ言葉の意味が要求する必然の性質であらう。現に多くの人々は『儀禮』といふ言葉その物に、習慣的行爲や社會的風

習といふ以上に、別に神聖な性質や神祕の意識を含むことを傳承的に豫想して居る。この意味からすれば神祕意識のない習慣的行爲は嚴密に儀禮とすら云はれないのであつて、まして呪術的儀禮は性質上最少限度の神祕の意識がなければ存立しない。従つて呪術成立の契機は、その自然的行爲との對立分化または神祕的因果觀念の發現にこれを求めなければならぬのであつて、たとひ其行爲形式の發生は別の原因から神祕觀念とは獨立に、而してそれ以前に成立することを是認しても、これは正當な意味に於て呪術とは名けられず、嚴密な呪術の成立には特殊の神祕的な因果關係の意識されることが必要な條件である。

然し呪術的行爲に神祕的な因果が認められることは、同時にそこにある神祕的な『力』の觀念を認めることだと速斷してはならない。學者は往々神祕的效果といへば直に神祕力の觀念を想定せんとするので、マレットも此點では早急にマナ觀念を結びつけ、キングも呪術儀禮の成立を最も適切に説明しながら、それが呪術となる時に此種の神祕力の觀念が現はれるといふ。然しこれは呪術觀念の發展の説明としては不當な飛躍であつて、呪術はその性質から云つても必ずしもかゝる神祕力の觀念はその必然的要素とはしない。(Beth, Religion und Magie bei den Naturvölkern. 123—122)た

いその行爲の因果が日常の行爲や事象と異るといふ意識を必要とするのみであつて、こゝに神祕意識といふのも必ずしもマレットやキングの擧げたやうな神祕力の觀念ではなく、その行爲と効果との結合が自然的な行爲に於けるそれと區別されて居ることを意味する。而してかういふ意味での神祕意識の存在こそ呪術の成立に必要なしてかつ十分な條件であつて、この意識が精練され具體化された結果である神祕力の觀念は、むしろさらに發達した呪術に於て始めて現はれると見なければならぬ。

要するに呪術の發生は知的合理的解釋に於けるやうに謬つた因果觀念や神祕的な力の觀念が基になつて、それから儀禮や行爲が生れたのではなく、本能や衝動的な行爲、特に實際的な目的を有しない表出運動や遊戯模倣等の行爲が、個人的または社會的に習慣風習となつたものである。換言すれば呪術的行爲や儀禮の發生は計畫的ではなしに、ベートのいふやうにむしろ偶然的である。しかしかくして出來た行爲の形式はそれ自身では性質上嚴密な呪術ではなく、むしろ『先呪術的』行爲であつて、それに特殊の効果の信念が伴ひ、その手段と目的との因果關係に多少の神祕性が認められる時に、それが始めて呪術として成立するのである。しかし先呪術的行爲

と嚴密なる呪術その物とは其心理的性質に大なる選庭があるのであつて、前者が後者となる心理的過程は時間的には殆んど同時であることもあるが、また可なり長い時代の變化にまつことも多い。故に先呪術的行爲の發生の過程を直に呪術の發生と見做すかのやうな見解は當を得ないのであつて、兩者は多少これを區別して考へ、眞の呪術は先呪術的行爲がある效果に向つての目的行爲となり、自然的な實際的行爲と區別されて神祕的な方法と認められた時に現はれるとしなければならぬ。此點に於て先に私が呪術に於ける超自然的合理性の意識について論じたことは必ずしも無用でなかつたと思はれる。